

# クラシック音楽入門講座

## 第5講 古典派の巨匠たち(2) ベートーヴェン

講師：佐藤卓史

2022年3月13日(日) 小手指公民館分館

“整備者”ハイドン、“統合者”モーツァルトの跡を継いで、ついに西洋音楽史上最大の作曲家ベートーヴェンが現れる。今回はその人生のエピソードに頼らず、残された作品を通してベートーヴェンが音楽界に与えたインパクトの強さを振り返る。

### 1. ベートーヴェンの年表

1770.12.16(?). ボン(ドイツ)で誕生。

父方の祖父ルートヴィヒはボン宮廷楽長、父ヨハンは宮廷歌手という音楽家系。

父はアルコール依存症だったが長男ルートヴィヒに大きな期待をかけスパルタ教育を施す。

1778 「6歳の神童」の触れ込みでピアニストとしてデビュー(実年齢は7歳)。

1780頃～ 宮廷オルガニストのクリスティアン・ゴットロープ・ネーフェ(1748-1798)に師事。

1787 最初のウィーン旅行(約2週間)。母危篤の報を受けすぐに帰郷を余儀なくされる。

母死去、さらに酒癖が悪化した父に代わり家長として2人の弟の面倒を見る。

1789 ボン大学に聴講生として入学、啓蒙思想に触れる。

1792 第1回イギリス旅行から帰国途中のハイドンと面会、弟子入りを許される。

11.2. ウィーンに出発。以降ボンには生涯戻らず、後に弟たちをウィーンに呼び寄せた。

ウィーンではハイドン、シェンク、アルブレヒツベルガーらに師事。

1795 「3つのピアノ三重奏曲」作品1を出版、作曲家としてデビュー(創作活動《前期》)。

技巧派ピアニストとしても活躍するが、次第に聴覚に異常を来す。

1802 「ハイリゲンシュタットの遺書」(難聴の悪化を弟に告白した手紙)を書く。

1804頃～ 「傑作の森」(創作活動《中期》)。

1809 ナポレオン軍がウィーンを占拠、主要なパトロンだった貴族たちが疎開し苦境に陥る。

1812 ボヘミア(チェコ)の温泉地テプリッツでゲーテと会う。

1814 ウィーン会議。前年に作曲・初演した「ウェリントンの勝利」が大成功を収める。

1815 次弟カールが死去、遺児(甥)カールの後見人となる。

1817頃～ 創作活動《後期》

1824 最後の交響曲となる「第9番」(第九)初演。

1826 甥カール自殺未遂。

1827.3.26. 肝硬変のため死去。56歳。

### 2. ベートーヴェンの人生と、それを語る危険

● **社会の変革期**(フランス革命精神への共感、「芸術家」の自尊心、ナポレオンへの複雑な感情)

● **捏造されたエピソード**

晩年の“無給の秘書”アントン・シントラー(1795-1864)の証言の大部分が捏造と判明。

シントラー経由を含め、多くの有名なエピソードの信憑性には疑義が呈されている。

→“偉人”であってほしいという願い、ドイツ民族主義の象徴に利用

### 3. ベートーヴェンの創作活動

■創作時期 前期 (1795-1800)・中期 (1801-1814)・後期 (1816-1827)の3区分

■主な作品 ピアノ・ソナタ(32曲)→弦楽四重奏曲(16曲)・交響曲(9曲)

制作課題を設定、まずピアノ・ソナタでプロトタイプを作り、それを大編成作品に応用  
作曲家の自発的な意欲により創作・出版され、世に問われる「芸術作品」  
=1曲1曲に新たな挑戦があり、時代が経ても消えることのない「記念碑」的な作品に

#### ●前期：ハイドン、モーツァルトの伝統を継承

※参考：古典派器楽曲の楽章配列

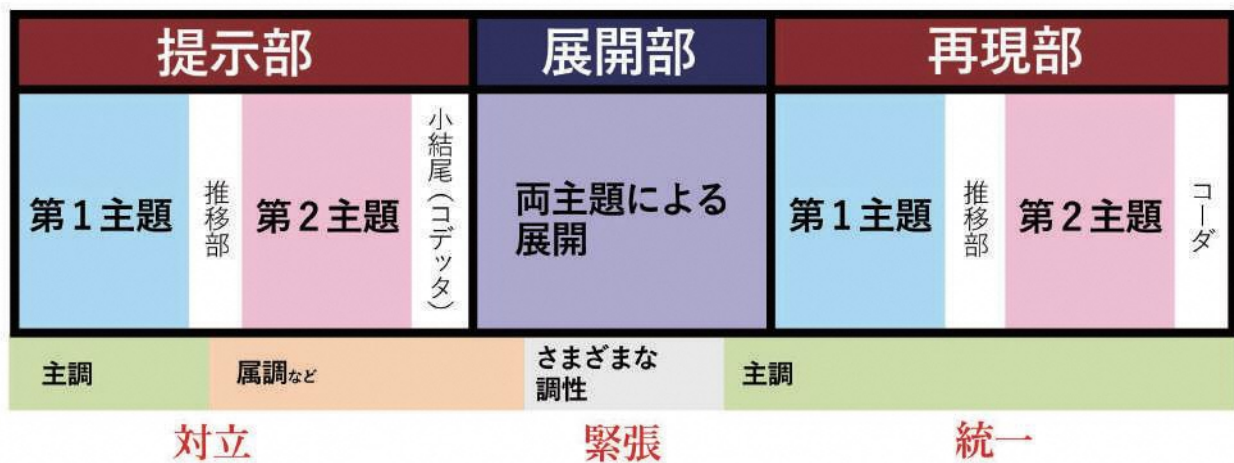
第1楽章：ソナタ形式(中庸～快速)

第2楽章：「緩徐楽章」(緩)・第1楽章と異なる調性

第3楽章：「メヌエット」(中庸)または「スケルツォ」(急速)・三部形式

第4楽章：「フィナーレ」・ロンド形式またはソナタ形式(快速)

※参考：ソナタ形式の模式図



#### 【主な作品】

ピアノ・ソナタ Op.2(3曲、交響曲に匹敵する4楽章形式)、Op.7、Op.13「悲愴」、Op.22

弦楽四重奏曲 Op.18(6曲)

ピアノ協奏曲 第2番 Op.19、第1番 Op.15

交響曲 第1番 Op.21、第2番 Op.36

#### ●中期①「実験期」：ソナタの枠組みを揺るがす実験作

##### 【主な作品】

ピアノ・ソナタ Op.26(中間楽章(緩徐楽章・スケルツォ)の順序を逆転)

Op.27『幻想曲風ソナタ』(ソナタ形式の開始楽章を排除。第1曲では全楽章を切れ目なく接続。

第2曲「月光」では開始楽章を削除し緩徐楽章から始まる3楽章構成を試みる)

Op.31(第2曲「テンペスト」では第1楽章に頻繁なテンポ変化を設定)

ピアノ協奏曲 第3番 Op.37

交響曲 第3番 Op.55『英雄』(緩徐楽章に葬送行進曲、終楽章に変奏曲形式を採用。

演奏時間50分は当時としては破格の規模)

## ●中期②「ドラマティック期」：モチーフ操作の極限を追求

主題から特定の音型・リズム・和音などの要素(モチーフ)を抽出し、それらを組み合わせることで音楽を構築していく手法。

### 【主な作品】

ピアノ・ソナタ Op.53「ワルトシュタイン」(冒頭のバスの上昇ラインが全楽章を統一)

Op.57「熱情」(第1楽章第1主題に現れるモチーフで全曲を有機的に統合)

ピアノ協奏曲 第4番 Op.58、ヴァイオリン協奏曲 Op.61

弦楽四重奏曲 Op.59(「ラズモフスキー・セット」)

交響曲 第5番 Op.67「運命」(単一モチーフで第1楽章を構築、全楽章の統合も試みる)

第6番 Op.68「田園」(全5楽章、自然の描写。各楽章とも標題つき = ロマン派の「標題音楽」の先駆)

## ●中期③「ロマンティック期」：ロマン派の先駆

### 【主な作品】

ピアノ・ソナタ Op.78「テレーゼ」(抒情的・旋律的な第1楽章第1主題、簡素な構成)

Op.81a『告別』(ルドルフ大公との別れと再会という個人的な物語を作品化)

ピアノ協奏曲 第5番 Op.73「皇帝」

弦楽四重奏曲 Op.74「ハープ」、Op.95『セリオーン』

交響曲 第7番 Op.92、第8番 Op.93(緩徐楽章を排除、リズムモチーフの新機軸)

## ●後期：孤高の音楽

### 【主な作品】

ピアノ・ソナタ Op.106「ハンマークラヴィーア」(4楽章、演奏時間40分の超大作)

Op.109-111(最後の3連作。いずれも小規模だが独特の音響世界)

交響曲 第9番 Op.125 (声楽を初めて交響曲に導入。シラーの詩による頌歌「歓喜に寄す」による

オラトリオ風の第4楽章まで、演奏時間75分を要する。普遍の「クラシック音楽」の象徴的存在)

弦楽四重奏曲 Op.127・130・131・132・135 (作曲家の内奥を語る最終到達点)

## 4. ベートーヴェンの功績と影響

●“イノヴェーター”(改革者):音楽のあり方、音楽家の生き方を定義

### ●後世への圧倒的な影響力

- ・シューベルト…同時代のウィーンで生き、畏怖・コンプレックスの対象
- ・ヴァーグナー…15歳でベートーヴェンに感化され音楽家の道へ、舞台作品に活路を見いだす
- ・ブラームス…後継者として期待を一身に受け、交響曲第1番の完成に20年を要する
- ・マーラー…「第九のジンクス」を恐れ、本当に交響曲第9番完成直後に急死

ベートーヴェンなくしてクラシック音楽は完成しなかった。

次の世代の作曲家たちは、巨星の指し示した方向へひた走り、新たな時代を作っていく。

しかし彼らの向かった先はてんでんばらばらだった…!

【譜例】 ピアノ・ソナタ 第23番 へ短調 Op.57「熱情」  
 第1楽章第1主題(冒頭)で提示されるモチーフの例

Opus 57

23. *Allegro assai*

⑤

⑩

⑭

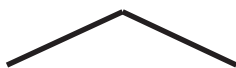
*pp* *poco ritardando* *pp* *f* *a tempo* *p* *pp*



【音型】 分散和音(アルペジオ)



【リズム】 5:1の鋭い長短リズム



【音型】 山型(ド-レ-ド)



【和音】 減七の和音



【リズム】 同音連打から始まる“運命の動機”